



中高本山参拝



賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。 愚者が心は、内は愚にして外は賢なり。

学校長 乾 文雄

上の文は親鸞聖人が80歳を超えて書かれたと伝えられる『愚禿鈔』に出てきます。少々乱暴ではありますが、私なりに現代語訳をすると、

「賢者と呼ばれる方々の信仰の姿を見ると、内には確かな賢明さを抱きながらも、外(他人)から見ると愚かな人の姿に見えます。愚か者である私は、内は愚かでありながらも、外に向けては賢明に映るように装っています」となります。

「賢者」とは恐らくは「七高僧」と呼ばれる、釈尊の教えを自分にまできちんとお伝えいただいた印度・中国・日本の高僧の方々であり、その中でも、直接出あい教えをいただく法然上人のことでしょう。「愚者」はご自身のことに他なりません。親鸞聖人がこのお言葉によって伝えようとした大事なことを、中高生という若い人たちとどのようにすれば共有できるのかと考えていた時、一人のアスリートの姿に気づきました。

彼は、本人の意図とは関係なく、本校の存在を日本中ではもとより、世界に向けて発信し続けてくださっています。ありがたいことです。もちろん本校とはほとんど縁の無い方なのですが、テレビやネットのニュースで「オオタニさん」という文字が映らない日はありません。(海外からのお客様に、時々関係を聞かれることがあります。そんなときは笑顔で「はい、お名前が一緒です」とだけお応えしています。)

彼を目にした人の中で、彼のことを「愚者である」と評価する人は、恐らくはないことでしょう。野球というスポーツに取り組む姿勢だけではなく、これは私の想像ですが、日頃の振る舞いに関しても「超」のつく素敵な方なのでしょう。

話は変わりますが、子どもたちが一番いい表情を見せてくれる

のはいつか。それは「知る・わかる・できる」が整った時、つまり、知らなかったことを知った時、どうしてもわからなかったことが理解できた時、どれだけやってもできなかったことが初めてできた時のように思うのです。何も勉強の話に限りません。生きる世界の広がり、内なる世界の深まりを感じた時と言ってもいいかもしれません。

しかし、その次に訪れる「知っている・わかっている・できている」という状態にある時、人は最も危ない状態にあると仏教に教えられました。「私は大丈夫です。わかっていますから」との思いで、人の話を聞かなくなったり、学ぶことをやめてしまったりという症状が出てくるからです。自ら成長を止めてしまうのです。

そこで「オオタニさん」の登場です。MVPを2年連続で取るような優れた選手でありながら、彼は試合中のベンチでは、ずっと学び続けておられます。パッドのようなものを手にして、時にコーチから、時に経験豊富なベテラン選手から、また時には、対戦したもののうまいかなかった若手選手から、相手チームの選手について、学び取るのに一生懸命です。周りからは憧れの念を集めるほどの選手でありながら、彼は「知っている・わかっている・できている」というところには立っておられないのでしょう。むしろ「自分はまだまだ知らないこと、わかっていないこと、できていないことだらけだ」というところに立って、試合中ですら学びを止めておられないのでしょう。

彼は、外からみれば「賢者」(または優秀な人)でありながらも、内には「愚者」(または途上の人)の自覚が伴っているのでしょう。だから、周囲の人々は彼のことを信頼し、尊敬するのでしょう。

なかなか真似のできない生き方ですが、彼を見て、「内は愚でありながらも、賢を装うどうしようもない私」に気づかせてもらうこととです。「恥ずかしいな～」と思わされる私です。